

# 新しい学力調査の設計と運用に関する研究

最終更新日：2015年8月31日

【プロジェクト代表者】  
学校教育講座  
准教授  
川口 俊明

キーワード ・学力調査 ・項目反応理論

## プロジェクトの内容（目的・方法・結果と意義）

現在、日本の小中学校を対象とし、数多くの学力調査が実施されています。しかし、多くのテストは、適切な理論に基づいて設計されていないため、学校現場にいろいろな弊害をもたらしています。

たとえば、(1)何のためにテストをしているのかわからなくなり、学校ごとの平均点を競うことが目的になってしまう。(2)毎年のテスト問題が違いため、成績の変化が指導の成果なのかどうかかわからない。(3)実施することに労力を使ってしまい、分析にまで手が回らない、といった問題です。

私たちのプロジェクトは、国際学力調査PISA等に採用されている、項目反応理論と呼ばれるテスト理論を元に、適切な学力調査の設計と運用を試みようとするものです。

## 成果の応用可能性（私たちの活動の成果は、このような分野にこのように貢献することができます。）

私たちのプロジェクトの成果を元に、次のような特徴を持つ学力調査を作成することが可能です。(1)一時点の成績を測定するだけでなく、一人一人の子ども「成績の変化」を測定することができます。(2)「成績の変化」をもたらした要因（家庭要因・学校要因・政策要因など）を把握し、今後の指導・政策の参考になる情報を得ることができます。

私たちのプロジェクトは、個々の学校の教員にとっても有益ですが、むしろ学力向上に悩む自治体にとってこそ有益なものです。テスト理論が高度化する昨今、適切な学力調査を設計することは、専門家のアドバイス無しでは不可能です。学力向上／学力格差といった教育問題の解決を目指す自治体・団体との研究協力を望みます。

## このプロジェクトの形成に寄与した制度等

福岡教育大学COC事業（不採択）

## プロジェクト構成員（所属・職名・氏名・役割分担）

学校教育講座・准教授・川口俊明・全体統括  
教育心理学講座・准教授・松尾剛・データ分析  
学校教育講座・准教授・樋口裕介・データ分析